

俳句雜誌



2021・7

SORA 97号

成層圏（1）

柴田佐知子

まづ貌の向き変へ蛇の動きだす
薫風や馬を脚まで磨きあげ
山賊も海賊も群れ夏の月

―「俳句界」六月号より―

祝・「青嶺」創刊二十周年

的射ぬく正しき背筋夏立ちぬ
青野へと放たれてみな駿馬なり
初夏の北を占めたる灘の紺

―「青嶺」七月号より―

新緑に染まりてゐたる産着の子
礎石野の端に螢火湧き出づる
悪女にも巫女にも鏡黄雀風
田水張り盆地が広くなりにつけり
屈服も武将の糧や青嵐
魚籠倒し草にのたうつ鰻かな
峰雲の根元を廻す観覧車
白靴の手強き交渉相手かな
推しはかる扇ゆつくり畳みけり



福岡 高倉 和子

東京 中田 みなみ

棲む沼に魚を残して竜天に

大川の軋む櫓で開く夏芝居

口笛の先に仔犬や草青む

幽霊に太鼓で創る波の音

屋敷より高き土蔵や松の花

幽霊の裾へ目のゆく夏芝居

水温む揃ひてきたる二重奏

ラーメンを待つ蘭鑄の鉢のぞき

恐竜の地層の上のさくらかな

蘭鑄の向う火花の中華鍋

砂利運ぶ轍の深さ山桜

蘭鑄の目の憑きのまま銀座へと

猫の子のどこも丸くて眠るばかり

垣の外を若きこゑ行く夜の秋

竹林に鳥の羽音や仏生会

ハンモック星を見る樹は決めてをり

長崎 荒井 千佐代

埼玉 服部 早苗

泣きながら流されてゆく雛あらむ

探鳥や沼照りのはや春の水

鶴帰る国際墓地のいま真上

きさらぎを割りゆく鳥の丸き胸

被爆せし川も港も桜かな

マウンドを均す筋目や風光る

パイ生地に刷毛を走らす蝶の昼

掌の椿の冷えを持ち帰る

屋根替の下りて屋根見る青空も

花きぶし風が鳴らしてゆくことも

一途なる女は脆し濃山吹

囀や養老先生思索中

われ常に先師の傍や緋の椿

花馬酔木密なることを樂しげに

磔像に一縷の灯聖土曜

しはがるるわが籠り居の声おぼろ

北九州 深川淑枝

野阜は王墓なりけり蓬摘む

座り産む吊目の土偶冴返る

甕棺に水抜きの穴雲雀東風

廻廊を湯桶提げゆく花の寺

相輪に風の韻きや厄払

初蝶や行く手に暗き座禅堂

わたつみに星出揃ひぬ雛の膳

潮入り川ふくらんで来し花疲れ

広島 戸栗末廣

ぞろぞろと人の集まる昼の火事

仏像はもとより木なりあたたかし

墓みちの風と日に湧き犬ふぐり

子につなぐものは正直残り雪

蛇出でてハローワークに人の列

橋の上の風素通りに西行忌

夕日濃き雛に疲れ見えにけり

縁側に鳥の足跡水温む

福岡 角野良生

双六の上がりのやうに逝かれけり

大漁旗で覆ふ柩よ寒椿

凧糸に遅れて凧の迫り上がる

耕耘機曲がれば鷺も曲がるなり

はぐれ火も隠れ火も措き野火走る

歳月の疲れはどこか雛にも

仔馬立ちしばらく揺れてをりにけり

代々の巢に代々の燕来る



粕屋 吉 田 蕨

曲るたび音の溢るる雪解川

竜天に登る踏切板を蹴り

さくら狩ふしぎな名前の駅に着く

落人をここで留めたり榧の花

勲章のやうなペン牝豚青葉木菟

福岡 永 淵 惠 子

菅公に六千の梅かしづける

数珠つなぎされ合格の祈願絵馬

鳥帰る大きな海の合戦絵

消え失せし埋葬品よ黄砂来る

葬式も墓も要らぬと花の下

直方 曾 根 富 久 恵

窯元の白磁に落ちし紅椿

妹に委ぬる生家雛まつり

春炬燵薬袋は夫のもの

塀の中覗けば逃ぐる恋の猫

霾や老いは目蓋に生まれり

岡垣 田 中 と し 江

春暁の山並雲のあふれくる

春の雪畝に獣の爪の跡

逝く犬のおなかの熱し春疾風

パラグライダー野焼の跡の風を飛ぶ

あたたかや藁のはみだす牛の口

北九州 河 原 敬 子

空の青川波の金青き踏む

春シヨール老いゆくことを楽しんで

やさしくさるる齡となりぬ黄水仙

境内で食ふるおにぎり百千鳥

菜の花の土手消す雨となつて来し

長崎 松 尾 龍 之 介

大欠伸するたびに水温むべし

野良にして独眼竜も恋の猫

大海にひかりをそそぐ春の川

刻々と木の芽張りつつ沢の音

耳底にぽんぽん蒸気鳥帰る

神奈川 窪 み ち 子

目つむれば捨て来し雪の町があり

枯葦の金色となる刻のあり

冬木の芽赤し佳きことありさうな

高枝に帰れぬ風の吹かれをり

日溜りに今日目覚めたるクロツカス

太宰府 山 本 則 男

飛梅の一輪つつの会者定離

引売りの籠に匂へる露の臺

弧々の声してまんさくの花盛り

雛の間の雛眠らする灯を落とす

白魚のまなこ素直にありにけり

須惠 苑 実 耶

大阪 井上 和子

会釈する少女のゑくぼ夏隣

東塔の風鐸響く春疾風

ふはと来てふんはり止まる黒揚羽

紀の川の光に沿ひて青き踏む

冷素麴の齢に今しばし

紀の川を眩しみ北窓を開く

爪を切る玉葱を剥く爪残し

若布刈竿に継ぎ足す鎌の耀り

湯殿より遊ぶ子の声青葉の夜

舌に砂残るも瀬田の蜷汁

千葉 原 友 子

大野城 森 田 明 成

ふつくらと御飯が炊けて涅槃西風

枝少し染めて芽立ちの並木道

囀りや手繰りしホース輪を重ね

春の暮街をはみ出すまちの影

子燕を見し日の父の肩車

手荷物は薬と着替うらけし

やがて散ることは思はず山桜

春愁や長く伸びたる剃り残し

夏立つや鼻血止めぬ綿染まり

狼籍は鳥のしわざや花盛り

兵庫 青 木 朋 子

長崎 仲 里 奈 央

柚子の傷撫でて更けゆく湯舟かな

善きことはもう足許にはこべ咲く

赤子抱くやうに白菜いただきぬ

山笑ふ回りは味方ばかりなり

初空へ放つ神事の一矢かな

木蓮や心も白きままなれば

いかのぼり戻るといふは落つること

次次と増ゆる雑用桜薬

羽根つきや負けん気強き同い年

ぶかぶかの結婚指輪蓮華草

太宰府 西住 三 恵 子

春日 三井 所 美 智 子

野遊びの箸に蜜蜂寄りて来し

腐葉土を入れて冬田を納めけり

大方は金の蕊なり白椿

院長は父の碁敵あたたかし

魂の抜けゆく目刺ちぢみけり

夫にメモ夫よりのメモ沈丁花

参道の店ごとに雛飾らるる

海光る面白きほど飛魚飛んで

歳時記の手ずれの厚さ養花天

休日任地での釣春の雲

直方 石橋幾代

凧揚げや川波追ふごと子が走る
干されたる地下足袋もんぺ山笑ふ
黙考の体動かず春炬燵
漁師町騒がせてゐる恋の猫
桜鯛尾を掴み上げ競られけり

熊本 松田明子

せめぎ合ひ風奪ひ合ふ凧合戦
父が揚げ子に預けたるいかのぼり
負け凧の空を離れゆく速さかな
刀匠の祖に奉る寒の水
水に水重ねて揺らし紙を漉く

福岡 秋津令

うららかや神も仏も在す家
あたたかや土偶は座して産む形
折鶴のまぎれてゐたる春落葉
歩行器の行き交ふ病棟夏兆す
看護師に背中拭かるる日の盛

兵庫 林徹也

若芝や赤子のやうに犬諭し
あたたかや親父ゆづりの金釘字
冴返る眼閉ぢゐる齒科の椅子
おほかたは灰となる身や花の宿
懺悔のあと歩くひと駅春の月

粕屋 秋千晴

落葉掃く箒に犬の乗つて来し
塵取りにお座りの犬冬ぬくし
自販機の鯉の餌買ふ春日和
子も入れてさくらさくらの水鏡
坂のぼる子のあとを追ふ花吹雪

福岡 あさなが捷

火の玉の闇突き破るお水取
相談もせずつれ帰る子猫かな
水温む伸縮自在猫の腹
春夕べ弥生の壺のふとりたる
十年を人見し菩薩八重桜

兵庫 えとう樹里

初めての乳吸ふ力草萌ゆる
退院の母とみどりご百千鳥
春の雷肩をぴくりと熟寝の子
のど奥を広げ泣く子や春茜
ゆりかごの赤子みてゆく子猫かな

東京 山田正子

寺の娘の所作静かなりヒヤシンス
泣いて生れ泣かれて逝くやしやぼん玉
春塵や鳩を蹴散らす一輪車
ぼる市の江戸棲しつけ糸のまま
芽柳の枝の先まで水明り